

タイの大学院における通訳翻訳教育の現状と動向

上原 みどりこ

(大阪大学大学院言語社会研究科博士前期課程通訳翻訳学専修コース)

In Thailand, interpreting and translation education has mainly been developed at universities. Whereas in Japan, it has also been offered at private vocational schools. The translation studies program (in Thai-English combination) for the bachelor degree was first offered at Kasetsart University around 1980. The Master's degree program (in Thai-French combination) was offered at Thammasat University from 1993. Since then, the number of translation studies programs has been increasing and in 2008 there are 8 translation studies programs at 5 different universities. At Chulalongkorn University, interpreting studies program has started only in 2007.

This paper aims to report and present the current status of education in interpreting and translation studies at graduate schools in Thailand. The critical observation on the problems is derived from on-the-spot investigation including a questionnaire survey and interviews at 8 master's course programs of 5 universities in Thailand.

1. はじめに

本稿では、タイの大学院における通訳翻訳教育の現状を具体的に紹介する。2008年7月、筆者が通訳翻訳プログラムを設置するタイの5大学（キングモンクット工科大学北バンコク校、タマサート大学、チュラーロンコーン大学、マヒドン大学、ラームカムヘーン大学）、8プログラムを訪問した成果である。カリキュラムの検討、プログラム主任教員への聞き取り調査、学生対象のアンケート調査などを踏まえ、タイの大学院における通訳翻訳プログラムの特徴と課題、また、今後の動向を示したい。

タイは、東南アジア地域の中央に位置し、その政治経済の中心的役割を担う国の一つである。海外からの対タイ投資は年々増加傾向にあり、2007年の外国人観光客数は1446万人に達するなど、観光国としての人気も伸ばしている。近隣諸国からの難民受入れ、労働者の流入という点においても、外国人の出入は少なくない。このような状況のもとに活躍する通訳者、翻訳者がいかに養成されているのか、タイの通訳翻訳教育の現場を探る。

UEHARA Midoriko, "Interpreting and Translation Education of the Graduate Schools in Thailand." *Interpreting and Translation Studies*, No.8, 2008. pages 337-354.

© by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

2. タイにおける通訳翻訳教育

タイの通訳翻訳教育は大学を中心に展開されている。民間の通訳翻訳訓練機関はほとんど見られず、対照的な日本の場合と状況が異なる。

ピニットプーワドン (Pinitpouvadol) (1986) から、大学学部レベルでは1986年当時、すでに外国語学科(英語科、フランス語科、中国語学、ドイツ語科、日本語科等)において翻訳関連科目が配置され、カセサート大学人文科学部外国語学科には独立したコースとして翻訳科が設置されていたことがわかる。

一方で1984年に、チュラーロンコーン大学文学部英語学科が、翻訳の職業人育成を目的に就学期間1年間のプラカートニヤバット バンディット (Diploma もしくは準修士に相当) 課程・タイ語-英語翻訳コースを開設した。1989年にはタマサート大学教養学部フランス語学科が、1991年には同大学英語学科においても、同様の翻訳コースを開設している。そして、これらが前身となり、大学院修士課程に翻訳プログラムが設置された。1993年にタマサート大学が大学院修士課程に初の翻訳科(フランス語-タイ語専攻)を設置し、主だった国立大学大学院に翻訳科、翻訳専攻が設けられた。現在では5大学に8の翻訳プログラムが存在する。こうしてタイではこれまで主に翻訳教育に重点が置かれてきた。通訳プログラムについては、チュラーロンコーン大学大学院修士課程に全国でも唯一の通訳科が2007年に設置されて間もない(表1)。

表1 通訳翻訳教育の沿革

大学学士課程	
<u>1986年</u>	・外国語学科において翻訳関連科目の開講されている ・カセサート大学人文科学部外国語学科翻訳科が設置されている
プラカートニヤバット バンディット課程	
<u>1984年</u>	・チュラーロンコーン大学文学部英語学科がタイ語-英語翻訳コースを開設
<u>1989年</u>	・タマサート大学教養学部フランス語学科が翻訳コースを開設(～1993)
<u>1991年</u>	・タマサート大学教養学部英語学科が翻訳コースを開設(～2006)
大学院修士課程	
<u>1993年</u>	・タマサート大学修士課程翻訳科(フランス語-タイ語専攻)開設
<u>1995年</u>	・ラームカムヘーン大学修士課程翻訳科(英語-タイ語専攻)開設
<u>1998年</u>	・マヒドン大学修士課程コミュニケーション・開発 言語文化科(翻訳専攻)開設
<u>1999年</u>	・ラームカムヘーン大学修士課程翻訳科(フランス語-タイ語専攻)開設 ・チュラーロンコーン大学修士課程翻訳科(英語-タイ語専攻)開設 ・チュラーロンコーン大学修士課程翻訳科(フランス語-タイ語専攻)開設
<u>2006年</u>	・タマサート大学修士課程翻訳科(英語-タイ語専攻)開設 ・キングモンクット工科大学北バンコク校修士課程 教育・ビジネス翻訳科開設

2007年	・チュラーロンコーン大学修士課程通訳科（英語ータイ語専攻）開設
-------	---------------------------------

学士課程唯一の翻訳プログラムであるカセサート大学人文科学部外国語学科翻訳科は、現在、学生を受け入れていないため、タイの通訳翻訳教育の主たる場は大学院修士課程に限定される。

タイ国内の大学院に設置、開講されている通訳翻訳関連プログラムは次のとおりである。

1) キングモンクット工科大学北バンコク校教養修士課程 教育・ビジネス翻訳科

（以下、「キングモンクット大翻訳科（英）」）

2) タマサート大学教養修士課程翻訳科 英語ータイ語専攻

（以下、「タマサート大翻訳科（英）」）

3) タマサート大学教養修士課程翻訳科 フランス語ータイ語専攻

（以下、「タマサート大翻訳科（仏）」）

4) チュラーロンコーン大学文学修士課程翻訳科 英語ータイ語専攻

（以下、「チュラーロンコーン大翻訳科（英）」）

5) チュラーロンコーン大学文学修士課程通訳科 英語ータイ語専攻

（以下、「チュラーロンコーン大通訳科（英）」）

6) マヒドン大学教養修士課程コミュニケーション・開発 言語文化科 翻訳専攻

（以下、「マヒドン大翻訳専攻（英）」）

7) ラームカムヘーン大学教養修士課程翻訳科 英語ータイ語専攻

（以下、「ラームカムヘーン大翻訳科（英）」）

8) ラームカムヘーン大学教養修士課程翻訳科 フランス語ータイ語専攻

（以下、「ラームカムヘーン大翻訳科（仏）」）

いずれも国立大学に設けられたプログラムであり、対象言語は英語もしくはフランス語と、タイ語間に限定されている。5大学に8プログラムが開講されており、内訳は、英語-タイ語の翻訳プログラムが5、フランス語-タイ語の翻訳プログラムが2、英語-タイ語の通訳プログラムが1ある。

コミュニケーション・開発 言語文化科の一専攻に属する 6) マヒドン大翻訳専攻（英）を除いては、すべて独立したコースとして設置されている。

また、今回の調査対象とはしなかったが、上記 1)~8) のほかに、国立チュラーロンコーン大学文学修士課程翻訳科（フランス語ータイ語専攻）がある。入学定員が満たされることなく、開設年度（1995年）を除いて現在まで一度も開講されるに至っていない。

3. 教育カリキュラム

大学院のカリキュラムは、タイ国教育省告示「大学院カリキュラム基準規定」¹⁾に従い構成されている。同規定には、カリキュラムの理念および目的、システム、単位換算、カリキュラム構成、単位認定および互換、教員数および資格、論文・課題研究指導、修了認定、学位などに関する基準が定められている。大学はこれに従い5年毎にカリキュラムの見直し、改訂の実施を義務付けられている。

以下、通訳翻訳プログラムの教育カリキュラムについて、特徴をみていく。

3.1 理念・目的

各プログラムの教育目標は、1. 高度な通訳・翻訳能力を有する人材の養成、2. 社会サービスに資する職業通訳者・翻訳者の養成、3. 通訳・翻訳研究への貢献、4. 研究者・指導者の養成、の4つが主な内容である。さらに、翻訳物を分析し評価する能力を養う、翻訳で生じる問題を分析し解決する能力を養う、職業倫理を培う、などを掲げるプログラムもある。

3.2 入学について

3.2.1 応募条件

応募条件は、大学院カリキュラム基準規定第11項〔入学資格〕に定める「学士号を取得している、または、それに準ずる教育を受けていること」のほか、各大学独自の条件が示されている。次の大学では、学業成績、語学能力試験結果について具体的な基準を示し、一定以上のレベルの者に受験する機会を与えている。社会人のリカレント教育枠を設けている大学もみうけられる（表2）。

表2 応募条件（学業成績、語学力、職務経歴について）

1) チュラーロンコーン大翻訳科（英） 同大学学術試験センター英語試験（CU-TEP） ²⁾ 550点以上
2) マヒドン大翻訳専攻（英） GPA 2.5以上（TOEFL 500点以上またはIELTS 5.5以上の場合、入試の英語試験は免除）*プランB応募には、3年以上の翻訳関連職務経歴も必要
3) ラームカムヘーン大翻訳科（仏） 次のいずれかの学業成績を収めていること。(1) 首席で修了している、(2) GPA 2.75以上、(3) 主専攻における GPA 3.00以上、(4) (1)～(3) に該当しないが、フランス語使用の職業経歴が3年以上あり、国家機関や民間機関の研修派遣によるもの、翻訳実績がある、または、大学がふさわしいと認めた者
4) チュラーロンコーン大通訳科（英） 同大学学術試験センター英語試験（CU-TEP）580点、TOFEL 580点、またはIELTS 6.5以上

3.2.2 選抜方法

選抜試験は、翻訳プログラムでは主に外国語と翻訳の試験が行われ、加えて、母語（タイ語）能力試験、要約、一般常識の試験を課すものもある。

唯一の通訳プログラムであるチュラーロンコーン大通訳科（英）の試験は、タイ語および外国語の運用能力、読解、要約、通訳・翻訳能力、発音、自己表現力などが審査される（表3）。

また、全てのプログラムに人物考査のための面接試験がある。

表3 入学選抜方法

翻訳プログラム	
1) キングモンクット大翻訳科 (英)	1. 翻訳 (英語からタイ語へ、タイ語から英語へ) * 辞書持込可、2. 英語 (一般) * TOEFL 550 点以上は免除
2) タマサート大翻訳科 (英)	1. 英語要約、2. タイ語作文、3. 翻訳 (英語からタイ語へ)
3) チュラーロンコーン大翻訳科 (英)	1. タイ語、2. 英語、3. タイ語－英語翻訳
4) マヒドン大翻訳専攻 (英) *	1. 英語、2. 一般常識、3. コミュニケーション、開発のための言語・文化
5) ラームカムヘーン大翻訳科 (英)	1. タイ語、2. 翻訳試験 (英語からタイ語へ)、3. 英語試験 (R.U.TEST)
6) タマサート大翻訳科 (仏)	1. フランス語、2. タイ語運用能力、3. 翻訳、4. 一般常識
7) ラームカムヘーン大翻訳科 (仏)	1. 翻訳 (フランス語からタイ語へ)、2. フランス語
通訳プログラム	
8) チュラーロンコーン大通訳科 (英)	筆記 1. 作文 (タイ語、英語)、2. サマライゼーション (英語からタイ語へ)、 3. 翻訳 (タイ語から英語へ、英語からタイ語へ) 口答 (発音能力、抽象的思考力、Self-Assessment Speech)

*コミュニケーション・開発 言語文化科内の他専攻との共通試験

3.2.3 在籍学生数・入学状況

2008年7月現在の在籍学生数は表4に示すとおり。プログラム種別では、英語－タイ語対象の翻訳プログラム234名、フランス語－タイ語対象の翻訳プログラム25名、英語－タイ語対象の通訳プログラム8名、計267名の学生が在籍する。

表4 在籍学生数 (2008年7月)

1) キングモンクット大翻訳科 (英)	46名
2) タマサート大翻訳科 (英)	55名
3) チュラーロンコーン大翻訳科 (英)	77名
4) マヒドン大翻訳専攻 (英)	30名
5) ラームカムヘーン大翻訳科 (英)	26名

6) タマサート大翻訳科(仏)	16名
7) ラームカムヘーン大翻訳科(仏)	9名
8) チュラーロンコーン大通訳科(英)	8名
計	267名

表5は2007年度、2008年度の各プログラムの入学状況を示している。2008年度は、ラームカムヘーン大翻訳科(英)および同大学翻訳科(仏)が、合格者の定員を満たさなかったため、開講を見合わせた。とりわけ、フランス語-タイ語対象の翻訳プログラムの学生確保が難しいという。上記のラームカムヘーン大翻訳科(仏)のみならず、タマサート大翻訳科(仏)についても状況が厳しく、2008年度は3名という少人数で開講に踏み切っている。

表5 入学者数

名称	募集定員	2007年度	2008年度
1) キングモンクット大翻訳科(英) 昼間主	30名	15名	閉鎖
2) キングモンクット大翻訳科(英) 夜間主	20名	8名	19名
3) タマサート大翻訳科(英)	30名	25名	30名
4) チュラーロンコーン大翻訳科(英)	40名	23名	26名
5) マヒドン大翻訳専攻(英)	(30名*)	6名	5名
6) ラームカムヘーン大翻訳科(英)	40名	11名	開講せず
7) タマサート大翻訳科(仏)	15名	7名	3名
8) ラームカムヘーン大翻訳科(仏)	20名	6名	開講せず
9) チュラーロンコーン大通訳科(英)	15名	8名	隔年開講

*コミュニケーション・開発 言語文化科全体(他専攻を含む)の募集人数

3.3 就学期間・曜日、学費

タイの教育機関は通常2学期制を採用している。大学の教育年度は6月に始まり9月下旬までを1学期、10月を学期休み、11月から3月中旬までを2学期、3月下旬から5月上旬までを夏季休暇としている。

就学期間は、ほとんどの通訳翻訳プログラムでは、2年以上4年もしくは5年以内と定めている。唯一、週の授業時間数が限られているタマサート大翻訳科(英)(週3コマ、9時間)のみ2年半以上7年以内としている。

授業開講曜日については、タマサート大翻訳科(仏)とマヒドン大翻訳専攻(英)は、平日開講の一般的なプログラムである。キングモンクット大翻訳科(英)は、昼間主コースと夜間主コースを併設している。それ以外はすべて、夜間もしくは、土曜、日曜に授業を開講しており、社会人の学生に対応したカリキュラムであるといえる。

課程修了までに要する学費はおよそ表 6 のとおりである。平日昼間開講のキングモンクット大翻訳科（英）昼間主コース、タマサート大翻訳科（仏）、マヒドン大翻訳専攻（英）は、44,000～70,200 バーツと、国立大学大学院（文系）の標準的な学費額である。そのほかは、夜間、土曜、日曜開講の時間外プログラムであるため、負担がより高額になっている。2007 年度新設のチュラーロンコーン大通訳科（英）は、学費額が突出して高い。効果的な実践指導のため、クラスサイズを小さく設定しているためである。学生数を制限せざるを得ない反面で、ゲストスピーカーや、第一線で活躍する通訳実務家を講師に招くための人件費負担が大きいのが理由であるという。

表 6 学費（最短年限修了の場合）

1) キングモンクット大翻訳科（英）昼間主	44,000 バーツ	約 141,000 円
2) キングモンクット大翻訳科（英）夜間主	140,000 バーツ	約 448,000 円
3) タマサート大翻訳科（英）	120,000 バーツ	約 384,000 円
4) チュラーロンコーン大翻訳科（英）	172,000 バーツ	約 550,000 円
5) マヒドン大翻訳専攻（英）	56,900 バーツ	約 182,000 円
6) ラームカムヘーン大翻訳科（英）	75,000 バーツ	約 240,000 円
7) タマサート大翻訳科（仏）	70,200 バーツ	約 225,000 円
8) ラームカムヘーン大翻訳科（仏）	35,000 バーツ	約 112,000 円
9) チュラーロンコーン大通訳科（英）	432,000 バーツ	約 1,382,000 円

*1 バーツ = 3.2 円（2008 年 7 月現在のレート）で換算

3.4 取得単位総数、単位構成

大学院カリキュラム基準規定第 7 項〔カリキュラム構成〕は、修士課程の最低取得単位総数を 36 単位以上とし、通訳翻訳プログラムでは、大学によって 36 単位または 45 単位を課している。

単位取得方法については、同規定に、修士論文作成のみによるプラン A(1)、修士論文作成と科目履修によるプラン A(2)、課題研究と科目履修によるプラン B、の 3 通りが定められているが、通訳翻訳プログラムでは、このうちプラン A(2) およびプラン B が採用されており、学生はいずれかを選択する（表 7）。

表 7 単位取得方法

取得単位総数	各大学の規定により 36 単位または 45 単位
プラン A(2)	修士論文（12 単位以上）および科目履修（12 単位以上）
プラン B	課題研究（3 単位以上 6 単位以下）および科目履修

学生がいずれのプランを選択するかは、各プログラムにより偏りが見られる。平日に開講されているマヒドン大翻訳専攻（英）、タマサート大翻訳科（仏）では、大半の学生が修士論文を作成するプラン A(2) を選択している。一方、夜間、土曜、日曜に開講されて

いる他のプログラムでは、プラン B が選択される傾向が強い。後者は、学生に社会人の占める割合が多いため、理論的な研究、分析よりも実践的な内容が好まれ、負担の少ない課題研究(3~6単位)が選ばれるためだと考えられる。

プラン B の課題研究は、表 8 に示すように、各プログラムにより名称、内容が独自に設定されている。翻訳プログラムでは、翻訳課題が最も多く採用されている。学生は文芸作品など何らかのテキストを選択し、定められたページ数の翻訳を行う。加えて、翻訳分析を課されるものもある。また、語彙集の作成を課題研究として認めている大学もある。通訳プログラムの課題研究については、2007年に新設されて間もないため、まだ具体的な成果はでていないが、広く通訳分野に関わる研究、調査としている。

表 8 プラン B・研究課題の形式および内容

1) キングモンクット大翻訳科(英): Special Problem (3単位) 翻訳(英語からタイ語へ 80 ページ、タイ語から英語へ 20 ページ)
2) タマサート大翻訳科(英): Individual Study (6単位) 翻訳理論研究、著名な翻訳作品の分析、小説等の翻訳(英語からタイ語へ、またはタイ語から英語へ)など
3) チュラーロンコーン大翻訳科(英): Special Research (3単位) 翻訳、翻訳分析、語彙集作成のいずれかを選択
4) マヒドン大翻訳専攻(英): Mini Thesis (6単位) 翻訳(英語からタイ語へ、またはタイ語から英語へ)、語彙集作成など
5) ラームカムヘーン大翻訳科(英)(①、②のいずれかを選択) ① Long Paper (6単位): 翻訳作品やテキストを選び、翻訳技法、異文化、ディスコースに関する諸問題の分析研究と解決法を提示し、論文形式で提出 ② Directed Study (6単位): 教員の指導のもと、英語のテキストをタイ語に翻訳する。 Directed Study 1 (3単位) および Directed Study 2 (3単位) からなり、それぞれ 25 ページ、35 ページ以上の原稿を翻訳する
① タマサート大翻訳科(仏): Individual Translation Project (6単位) 一般書籍、学術文献、文芸作品などをフランス語からタイ語に翻訳する
② ラームカムヘーン大翻訳科(仏): Directed Study (6単位) 教員の指導のもと、フランス語のテキスト(60 ページ以上)をタイ語に翻訳する。翻訳から生じた問題を分析し、レポート形式でまとめる(10 ページ以上)
③ チュラーロンコーン大通訳科(英): Special Research (3単位) 広く通訳にかかわる研究、調査報告など

3.5 履修科目

3.5.1 必修科目

翻訳プログラムでは、必修科目に、翻訳理論、翻訳分析、翻訳の評価と校正、言語対照研究、文化、コミュニケーション、タイ語、専門用語、翻訳実習などの科目が配置されて

いる。通訳プログラムの必修科目は、ほぼすべてが通訳実習科目であることがわかる（表9）。

表9 必修科目

翻訳プログラム
1) キングモンクット大翻訳科（英）： 翻訳入門、対照研究（英語ータイ語）I・II、翻訳のための言語・文化、翻訳のレトリックと技術、研究とレポート作成、教育・ビジネス翻訳演習
2) タマサート大翻訳科（英）： 翻訳理論、翻訳のためのタイ語・英語対照研究、翻訳研究の方法論、翻訳のためのタイ語、翻訳のための英語、翻訳（英語からタイ語へ）、翻訳（タイ語から英語へ）、翻訳演習
3) チュラーロンコーン大翻訳科（英）： 翻訳研究、翻訳の談話分析、翻訳支援の資源と専門用語データベース作成、翻訳者のためのタイ語スキル、翻訳演習、翻訳実践（英語からタイ語へ）
4) マヒドン大翻訳専攻（英）： コミュニケーションの概念と理論、言葉と異文化コミュニケーション、職業におけるコミュニケーションのための言語、職業翻訳者のための理論と原理、バイリンガリズムと翻訳、専門分野の翻訳、タイにおける翻訳の発達：言語・文化研究、実用言語学と翻訳、翻訳演習
5) ラームカムヘーン大翻訳科（英）： 翻訳と通訳のための言語・文化、翻訳理論、通訳入門、サイトトランスレーション、研究とレポート作成、言語対照分析（英語ータイ語）、翻訳における意味論と文体論（英語ータイ語）、翻訳における諸問題（英語ータイ語）、研究とレポート作成、インターンシップ（英語ータイ語）
6) タマサート大翻訳科（仏）： フランス語のテキスト分析、翻訳者のためのタイ語作文術、翻訳の理論と方法、一般翻訳（仏語からタイ語へ）1・2、専門分野の翻訳（仏語からタイ語へ）・基礎、翻訳分析、インターンシップ
7) ラームカムヘーン大翻訳科（仏）： 通訳翻訳のための言語・文化、翻訳理論、通訳入門、フランス語の文書分析、言語対照分析（フランス語ータイ語）、翻訳の意味論・文体論（フランス語ータイ語）、翻訳の諸問題（フランス語ータイ語）、研究とレポート作成、インターンシップ（人文・社会分野の翻訳）
8) チュラーロンコーン大通訳科（英）： 逐次通訳（英語からタイ語へ）I・II、逐次通訳（タイ語から英語へ）、同時通訳（英語からタイ語へ）、同時通訳（タイ語から英語へ）、通訳のための談話分析、通訳者のためのパブリックスピーキング・テクニック、サイトトランスレーション、会議通訳、通訳演習

3.5.2 選択科目

翻訳プログラムの選択科目の多くは、翻訳実習科目である。一般、教育、ビジネス、ニュース、ドキュメンタリー、科学、技術、文芸、映画、映像、マスメディア、プリントメディア、経済、人文、社会、法律、学術、コンピュータ、情報技術など、対象とする分野は幅広い。タマサート大翻訳科（仏）では唯一、第3言語（英語）からタイ語への翻訳実

習科目の配置がみられる。

一方、通訳プログラムの選択科目は、翻訳研究、翻訳支援の資源と専門用語データベース作成が配置されている。

3.6 修了について

各プログラムの修了要件は、大学院カリキュラム基準規定第13項〔修了基準〕に従い、概ね次のように定められている(表10)。

表10 修了要件

<p>1) <u>プラン A(2) を選択した場合</u> カリキュラムに定められた全ての科目を履修し、GPA 3.00 以上の成績を修めなければならない。また、修士論文を提出し、最終試験(論文に関する口答試問)に合格すること。不合格の場合は、1 回限り追試を受けることができる。</p>
<p>2) <u>プラン B を選択した場合</u> カリキュラムに定められた全ての科目を履修し、GPA3.00 以上の成績を修めなければならない。また、理解力テスト (Comprehensive Examination) に合格すること。不合格の場合は、1 回限り追試を受けることができる。</p>

プラン B の理解力テスト (Comprehensive Examination) の実施時期と形式は、各大学により異なる。マヒドン大翻訳専攻(英)は、全てのコースワーク終了時(第3学期末)実施し、合格して初めて課題研究に取り組める。その他のプログラムはすべて、課題研究の提出後、最終学期末に卒業試験として実施されている。試験期間は、通常1~2日間で、コースワークで履修した必須科目を中心に翻訳理論、翻訳実技の筆記試験が行われる。さらに口述試験を課す大学もある。

修了が認定されると、大学によって、文学修士、または教養修士の学位(英語表記はいずれも Master of Arts) が授与される。学位記には、マヒドン大翻訳専攻(英)では「コミュニケーション・開発 言語文化」、それ以外の通訳翻訳プログラムでは「通訳」または「翻訳」と専攻分野が記される。

3.7 課外活動、インターンシップ

いくつかの翻訳プログラムでは、翻訳業務に関わる実地見学を実施している。新聞社、雑誌社、出版社、テレビ局、映画会社の翻訳部門を訪れ、ニュース翻訳、文芸翻訳、映像翻訳、映画字幕作成などの過程を見学する。また、チューラーロンコーン大通訳科(英)では、バンコクのエスカップ国際会議場など会議通訳の現場を見学する。優秀な学生は時に、通訳実務家である講師を補佐するパートナーとして会議場の通訳ブースに入る機会もあるという。

インターンシップについては、ラームカムヘーン大翻訳科(英)、同大学翻訳科(仏)の必須科目に「インターンシップ」(3単位)がある。両コースの設立当初から設けられた

科目で、公的機関や民間企業において実際の翻訳業務を体験するものである。学生の成績評価は、受け入れ機関の担当者により行われる。

ところが、実施開始後、研修先が遠方で学生の学業、職業に支障をきたす、受け入れ機関の担当者が多忙で成績評価をする余裕がない、学生の行った業務から責任問題が発生するなどの問題が生じ、中止されるに至った。この科目は現在、翻訳部署をもつ公的機関の職員が大学に出講する形で、翻訳実習を行っている。

タマサート大翻訳科（仏）プラン B の必修科目にも「インターンシップ」が配置されているが、受け入れ機関を継続的に確保することができず、科目開講ができないため、プラン B の選択自体ができなくなっている。

ほかに「インターンシップ」科目はみられないため、タイの通訳翻訳プログラムには実質上、インターンシップ制度はないのが現状である。

3.8 教員のプロフィール、指導教官

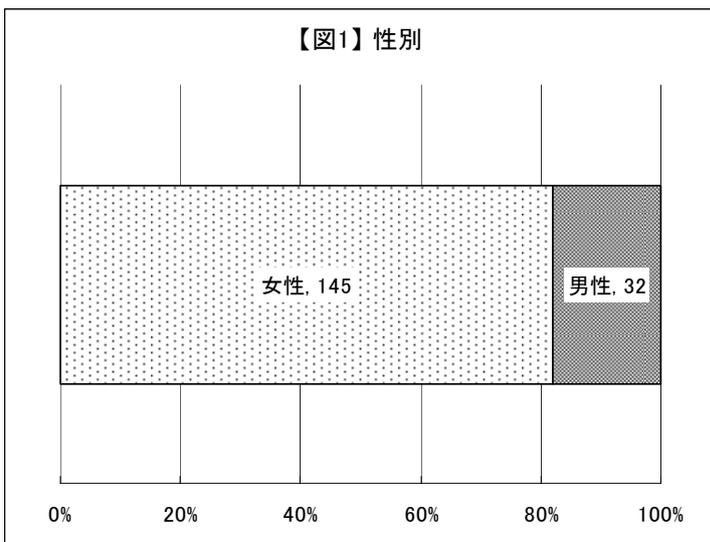
通訳翻訳プログラムの常勤教員は、英語学などの外国語、言語学、文学などを専門とする教員であることが多い。主に理論科目を指導する。外部からは幅広い実務の分野から数多くの非常勤講師が採用されており、主に実習科目を担当する。外部からの非常勤講師は、別に専門職（実務通訳者、実務翻訳者、作家、裁判官、検事など）を持っているため、リレー形式で講義を担当するなど出講の期間が短いことが多い。人事面でも非常に流動的である。

学生の主指導教官には、通訳翻訳プログラムの常勤教員が当たる。修士論文・課題研究が特定の専門分野の学問（医学、法学、工学など）に関わる場合、学内の他学部・他学科の教員や、学外の専門家が副指導教官やアドバイザーを務める（例・チューラーロンコーン大翻訳科（英）2006年課題研究「口腔癌用語集」は、同大学歯学部教員が副指導教官を担当）。

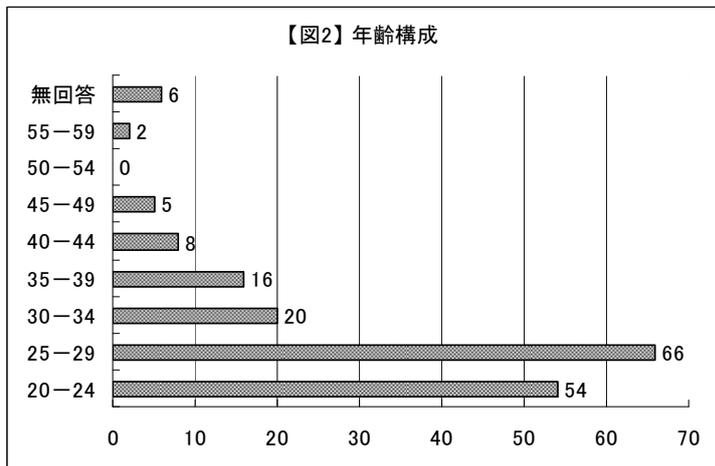
4. アンケート調査

今回の訪問調査では、通訳翻訳プログラムに在籍する全学生 267 名を対象に、学生のバックグラウンド、ニーズについてのアンケート調査を実施した。回答者数は 177 名（65%）で、内訳は、翻訳プログラムの学生 169 名（95%）、通訳プログラムの学生 8 名（5%）である。以下、回答結果を紹介したい。

4.1 性別、年齢構成

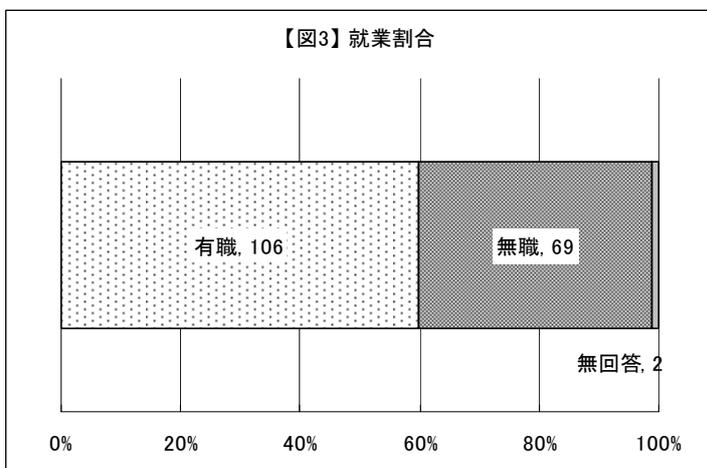


回答者 177 名の性別の内訳は、女性が 145 名 (82%)、男性が 32 名 (18%) という構成で、女性の占める割合が圧倒的に多い (図 1)。

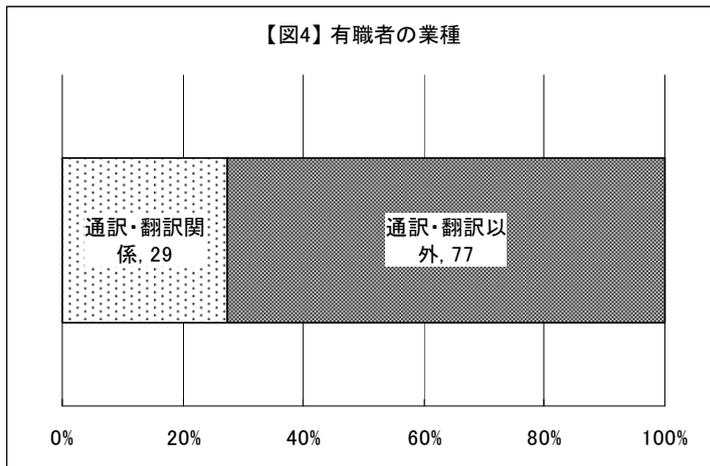


年齢は、22 歳から 58 歳までの幅広い年齢層の学生が就学していることが分かった。学部新卒と思われる 22 歳から 24 歳までの年齢層は 54 名 (30%) に過ぎず、大半が社会人の学生である (図 2)。

4.2 就業の有無、職種

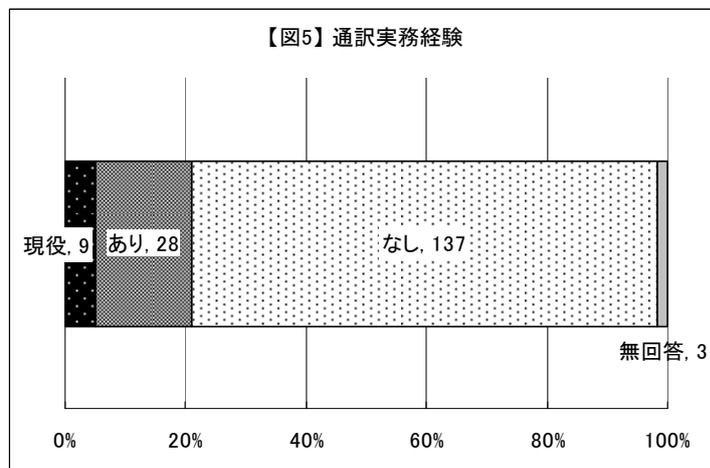


入学後の就業割合は、有職が 106 名 (60%)、無職が 69 名 (39%)、無回答が 2 名 (1%) である。全体の約 60% の学生が職業に就いている (図 3)。

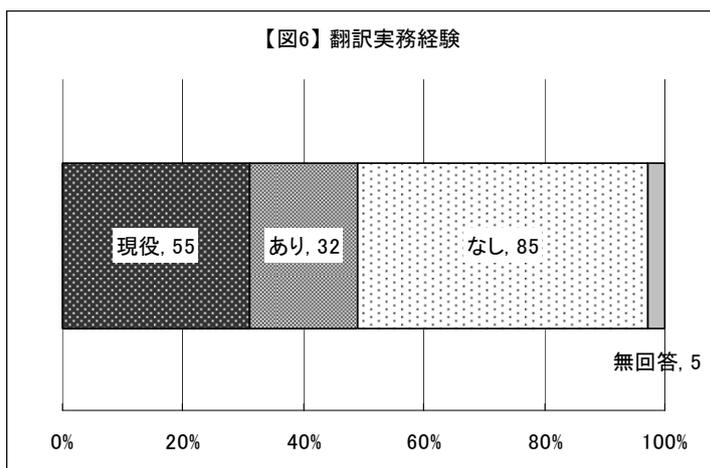


有職者 106 名のうち、通訳、翻訳関連の仕事に就いていると回答した学生は 29 名 (27%) で、全回答者 177 名中 16% である (図 4)。

4.3 実務経験



通訳実務経験については、現役 9 名 (5%)、経験あり 28 名 (16%)、経験なし 137 名 (77%)、無回答 3 名 (1%) という結果であった。「現役」と「経験あり」を合わせ、合計 37 名 (21%) の学生が通訳実務に関わっている (図 5)。

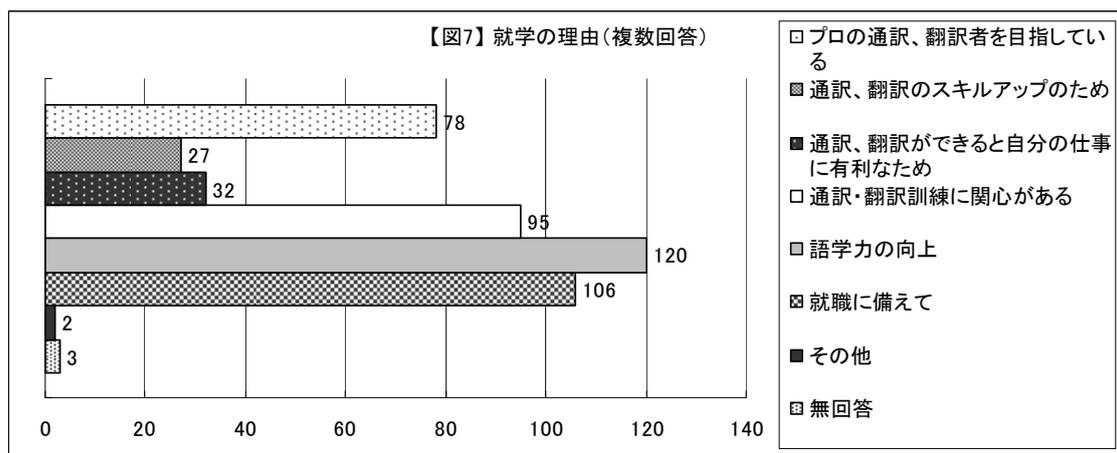


一方、翻訳実務経験については、現役 55 名 (31%)、経験あり 32 名 (18%)、経験なし 85 名 (48%)、無回答 5 名 (3%) という結果であった。「現役」と「経験あり」を合わせ、合計 87 名 (49%) の学生が翻訳実務に関わっている。

通訳実務経験者よりも翻訳実務経験者の方が多くなっているが、これは回答者に占める翻訳プログラム在学生の割合の多さが反映していると考えられる (図 6)。

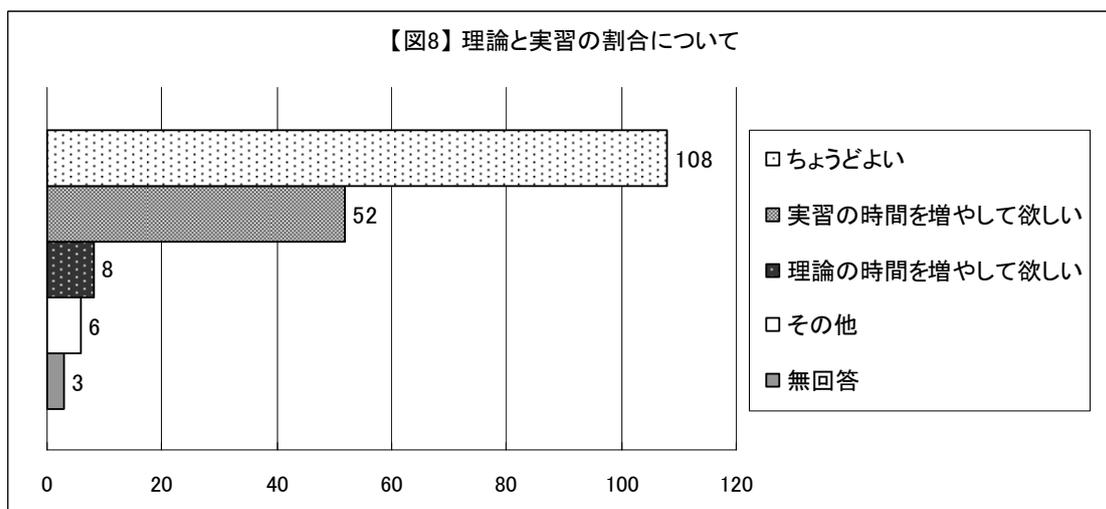
4.4 就学理由

就学の理由については複数回答であるが、「プロの通訳・翻訳者を目指している」78名(44%)、「すでに通訳、翻訳業についており、スキルアップのため」27名(15%)である。また、「すでに通訳、翻訳以外の仕事についているが、通訳、翻訳ができると仕事に有利なため」32名(18%)、「就職活動や卒業後の仕事のため」106名(59%)、「通訳・翻訳訓練に関心がある」95名(54%)である。「語学力の向上」は、120名(67%)と最も多い(図7)。



4.5 在籍中の通訳翻訳プログラムへの評価、要望

授業における理論と実習の割合についての質問には、「ちょうどよい」が108名(61%)と最も多く、「実習の時間を増やして欲しい」52名(29%)、「理論の時間を増やして欲しい」8名(5%)、その他6名(3%)、無回答3名(2%)であった(図8)。



このほか、在籍中の通訳翻訳プログラムに対して望む改善点について、自由回答形式により答えていただいた。主な回答を以下に紹介したい。

まず、翻訳プログラムについてみていく。科目に関しては、「翻訳実習の科目数、分野の種類を増やしてほしい。もっと多くの専門分野から講師を配置してほしい」という回答が最も多く、現状よりも多くの専門分野における翻訳実習科目の設置が望まれていることがわかった。また、翻訳プログラムでありながら、「通訳科目の設置」や「増設」の希望する回答も多かった。2007年度以前には通訳プログラムが存在しなかったことから、翻訳プログラムに通訳教育の役割が期待されていることがみてとれる。

授業や指導の面においては、「授業内容の充実化」を希望する声が多く、「授業に計画性がない」、「実習科目のリレー講義の連携がとれていない」などの不満や、「提出した翻訳課題は添削して返却してほしい」、「翻訳上の間違いや改善点をもっと指摘してほしい」といった個人対応への改善についての要望もみられた。

最後に環境面であるが、コース自体の開講は土日であるにもかかわらず、大学の設備や職員の勤務体制が平日対応である場合に、「コンピュータ室、図書館は土日を含め毎日利用できるようにしてほしい」、「土日に指導教官の指導を受けられるようにしてほしい」など、社会人学生にとっては切実な要望があげられた。

一方、通訳プログラムでは、「通訳ブースを増やしてほしい」、「実習時間をもっと増やしてほしい」、「個別の指導をもっと受けたい」という回答があげられた。

4.6 アンケート結果について

学生は、学部新卒で進学した者に比較し、仕事をもつ社会人が大半を占めている。回答者のうち16%は、すでに通訳、翻訳業に就いており、自己の通訳、翻訳のスキルアップのために就学している。

しかし、全体でみると、「将来プロの通訳者、翻訳者を目指している」学生は44%に過ぎず、通訳翻訳プログラムに就学する学生が必ずしもプロの通訳者、翻訳者を目的としているのではないことがわかる。自己の将来もしくは現在の職業において、通訳、翻訳、語学を使用する業務が含まれていたり、それらができると有利である、という理由から就学しているケースも多いようである。授業内容における理論と実践の割合については、半数以上が満足しているものの、約30%の学生は「実習の時間を増やしてほしい」としており、自由回答形式の要望の中に、「実習科目・分野の数を増やしてほしい」という意見が多いのも、自己の職種と一致した形での実践訓練を希望する学生が多いと理解できる。

5. 結びにかえて

5.1 まとめ

タイでは、元来、大学教員らが国家機関や民間企業の要請を受け、国際的な交渉や会議の通訳に赴き、翻訳に関わった。それに端を発し、大学が通訳・翻訳サービスを提供し、通訳翻訳教育を推進する主たる場となった。本稿で取りあげた通訳翻訳プログラムをもつ全ての国立大学には、翻訳（または翻訳通訳）センターが設置されている。その業務の質

に対する社会からの信頼は高い。また、通訳翻訳教育は、大学院に設置されている通訳翻訳プログラムのほか、学部、大学院の開講科目として、また、大学が一般向けに開講する短期的な公開講座の形で実施されている。

大学院の通訳翻訳プログラムでは、通訳翻訳分野の職業人の養成と、研究者、教育者の育成を主な目的としている。ただし、その実際は、翻訳プログラムと通訳プログラムでは多少状況が異なっている。開設されてから15年ほどが経過する翻訳プログラムでは、現在では実に幅広い分野の翻訳実習科目が開講され、また、同時に理論教育にも力が注がれている。一方、通訳プログラムは、2007年に国内唯一のプログラムが始まってまだ間もなく、現在のところ、質のある通訳者を社会に送り出すことを第一に、実践的教育を重視した取り組みがなされている。

対象言語は、英語、フランス語、タイ語に対応している。学生は、将来プロの通訳・翻訳者を志す者、現役のプロの通訳・翻訳者である者、語学教師や、通訳・翻訳学の教師もいる。また、その他の職業において通訳、翻訳、語学力を必要として受講する学生もいる。学生の目的はさまざまであるが、個々の学生の目的は明確でモチベーションの高さが窺われる。大半が社会人であり、リカレント教育の要素が強い。

5.2 今後の課題および展望

タイの大学院の通訳翻訳プログラムが抱えている大きな課題のひとつは、学生の数とその質の確保にある。2008年度は、入学定員を満たさず、2つのプログラムが開講を見合わせた。極めて少人数で開講したプログラムもある。学生募集をしながら、10年近く開講されていないプログラムも存在する。今後は、社会に通訳翻訳業務についての一層の理解を促す努力が必要であろう。例えば、大学院以前の教育課程の場で、あるいは一般に広く公開する形で通訳翻訳教育を普及させ、将来の通訳者、翻訳者の志望者を募ることが、ひいては学生の確保に通じると考える。

調査では、とりわけフランス語対象の翻訳科で、学生確保が厳しい状況にあり、少人数で開講している場合には、開講科目数が限られていた。こうしたプログラムについては、教員確保や経営の観点からも、大学の枠を超えたプログラム間の協力や連携が必要であろう。たとえば、大学間の単位交換制度により共通言語における科目の充実化を図ることが可能である。

第2の課題であるが、通訳翻訳プログラムの学生は、社会人が大半を占めている。こうした職業人の学生は、理論よりも、自分の職業に直結する実践的な教育を望む傾向が強い。加えて、仕事との両立の問題もあり、コースワークが修了し、修士論文・課題研究執筆の段階に入ると、学業を諦めてしまう学生が少なからずいて問題視されている。タイには、日本のような民間の通訳・翻訳スクールは見られず、通訳翻訳の実践を本格的に学べる場は大学院に限られている。しかし大学院は、実務者の養成だけでなく、研究、教育活動を行うところでもある。大学院の通訳翻訳プログラムの位置づけを明確にすること、また、いかにこうした職業人のニーズを把握し、カリキュラムに反映していくのが、今後のプログラムの充実につながると思われる。

第3の課題に、タイには現在、通訳、翻訳の分野の学会や学術雑誌がない。翻訳、通訳研究の成果は、言語学、外国語などに関する学会や学術雑誌を通じて発表されている。2005年、大学院カリキュラム基準規定が改正され、プランA選択の学生には、学術論文への投稿、または学術学会での発表が義務付けられた。学生の研究発表の場の確保、さらには今後の通訳翻訳教育や研究の発達と普及のため、そうした場の構築も課題となっている。

最後に通訳翻訳プログラムの対象言語についてであるが、現在は、英語、フランス語、タイ語のみとなっている。今後は多言語への対応の動きもでてくることが予想される。訪問したいくつかの大学院では、将来的な構想として、タイで通訳翻訳需要の高い中国語や日本語に対応したプログラムを設置したいこと、さらには、3言語以上を運用できるマルチリンガルの通訳者・翻訳者の養成を目指したいという。また、ビジネス上需要の高い外国語に限らず、ミャンマー、カンボジアなどの近隣諸国の言語、タイ国内の少数民族の言語、手話についても、通訳、翻訳者の不足が認識されている。2008年7月、タイ国学士院により開催された「国家言語政策」に関する国際大会においても、このような通訳者、翻訳者の養成は重要な課題として、取り上げられたという。

以上、今回の調査により、タイにおける通訳翻訳教育は今後さらなる発展の可能性をもっていることがわかった。

本稿ではタイの通訳翻訳教育について現状と課題を報告したが、グローバル化の進展により、世界の国々で通訳翻訳教育が活発化する傾向にある。そして、その中ではさまざま教育への取り組みや課題があろう。そうした情報を国を超えて相互に発信しあい、共有し合うことは今後の通訳翻訳教育の発展に一層重要となるものと考えられる。

謝辞： 本稿をまとめるにあたりご指導いただいた大阪大学津田守教授に深く感謝申し上げます。アンケートと聞き取り調査に快くご協力いただきましたタイの各大学院の先生方、学生の方々にも心からお礼申し上げます。

著者紹介： 上原みどりこ (UEHARA Midoriko) タイ語講師。東京外国語大学インドシナ語学科(タイ語専攻)卒業、大阪大学大学院言語社会研究科博士前期課程(通訳翻訳学専修コース)在籍。連絡先: mk_uehara@yahoo.co.jp

【註】

- 1) 本稿で取り上げた翻訳・通訳プログラムは、タイ国大学庁告示「1990年大学院カリキュラム基準規定」、または、「1999年大学院カリキュラム基準規定」に従いカリキュラム構成されている。2005年に規定改正があり、次回のカリキュラム改訂時には、各プログラムともタイ国教育省告示「2005年大学院カリキュラム基準規定」に従う。同規定の詳細については、タイ国教育省ホームページのタイ国教育省告示「2005年大学院カリキュラム基準規定」[On line] http://www.moe.go.th/webld/pdf/c_5.pdf (Aug. 1, 2008) から入手できる。

- 2) タイには大学各自が実施する英語検定試験がある。チュラーロンコーン大学の CU-TEP、タマサート大学の TU-GET、ラームカムヘーン大学の RU-GET などである。

【参考文献】

- Pinitpouvadol, S. Wongsutthitham, N. Boonyavatana, P & Korntapim, U. (1986). *Current Trends and Future Directions of Translation in Thailand*, Bangkok: Ramkhamhaeng University. 39-40.
- Thanayus Thanathiti. (2005). *Status of the Organization of Thai Higher Education in Language Translation and Interpretation Courses*. Nakhonpathom: Mahidol University.
- 染谷泰正・斉藤美和子・鶴田知佳子・田中深雪・稲生衣代 (2005) 「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」『通訳研究』第5号: 285-310.
- 田中深雪・稲生衣代・河原清志・新崎隆子・中村幸子 (2007) 「通訳クラス受講生たちの意識調査」『通訳研究』第7号: 251-253.
- 津田守編 (2005) 『世界の大学・大学院における通訳翻訳学プログラム』大阪外国語大学
- 津田守編 (2007) 『世界の大学・大学院における通訳翻訳学プログラム 続』大阪外国語大学
- 宮本マラシー・隅田敦子 (2007) 「タイ王国国立チュラーロンコーン大学」津田守編『世界の大学・大学院における通訳翻訳学プログラム 続』大阪外国語大学 6-17.

【参考ウェブサイト】

- Chalermprakit Center of Translation and Interpretation HP
[Online] <http://www.arts.chula.ac.th/~tran/main/index.php> (Aug. 29, 2008)
- English Department of Thammasart University HP
[Online] <http://www.english.arts.tu.ac.th/> (Aug. 29, 2008)
- Graduate College King Mongkut's Institute of Technology North Bangkok HP
[Online] <http://www.graduate.kmutnb.ac.th/pagefiles/curriculum/master.htm> (Aug. 29, 2008)
- Graduate School Ramkhamheng University HP
[Online] <http://www.grad.ru.ac.th/> (Aug. 29, 2008)
- Graduate School Thammasart University HP
[Online] <http://www.arts.tu.ac.th/graduate/degree.htm> (Aug. 29, 2008)
- Institute of Language and Culture for Rural Development Mahidol University HP
[Online] http://www.lc.mahidol.ac.th/TH/prog_langculture_ma.php (Aug. 29, 2008)
- Kasetsart University HP [Online] <http://www.ku.ac.th/> (Aug. 29, 2008)